

書評論文: 金鍾徳著『韓国語を教えるための韓国語の発音システム』

(中村麻結訳) 東京: ひつじ書房 2021*

**Book Review: *Korean Pronunciation System*
for *Korean Language Education* by KIM Chongdok**

(Japanese translation by NAKAMURA Mayu) Tokyo: Hituzi 2021

千田俊太郎

TIDA Syuntarô

キーワード: 韓国語、朝鮮語、発音、表記、語学教育

1 はじめに

本評が対象とする金鍾徳著『韓国語を教えるための韓国語の発音システム』(中村麻結訳)は2021年1月にひつじ書房から刊行された、次の韓国書籍の日本語訳である。

- 김종덕 (2017) 『한국어 교육을 위한 한국어 발음교육론』 서울: 박이정

原書の題名は直訳すると「韓国語教育のための韓国語発音教育論」であるから邦題とはいくつかの表現が異なる。いずれにせよ、本書ではいかなる発音をいかに教へるべきかといふことを論じるものである。「従来韓国で行われてきた非母語話者に対する朝鮮語教育は、母語話者に対する国語教育の延長でしかなかったと言っても過言ではない」(油谷 2007: 131) といった厳しい聲も聞かれる。幸ひに、この指摘は本書には該当しない。一讀すれば、母語話者のための規範と外国語教育のための規範について考へさせられ、既存の規範の「記述的な」不備などにも氣付かされることになる。正統な言語学教育を受けた讀者の中には作法通り「規範」と「記述」を峻別した上で、客観的な事実を觀察し、「決める」のではなく「分析する」ことにしか學術的價值がないものと信ずる向きがありはしないかと恐れる。念のためこの點から説き起こしておきたい。

2 母語話者と規範、外国語教育の規範

Jespersen (1933: 19-20) は規範文法の典型として外国語教育の現場で與へられる「その言語を正しく話し書くために守るべき規則」を擧げ、「この規則はしばしば極めて氣まぐれに見える」としながら、「調査對象の言語の話者が實際に言つたり書いたりしてゐることを探

* 本書評の一部は JSPS 科研費 19K00618 の成果を含む。

し出し、そのことで、話し手・書き手が本能的に従つてゐる諸規則を科学的に理解することを旨とする「純粹に「記述的」な文法」こそが価値が高いとしてゐる。現在の言語學の標準的な教科書で説かれる立場はまさにこのやうなものである。しかし、本書を讀むと、外國語教育のための規範は既存の母語話者向けの標準そのままでは役に立たない、むしろ母語話者が無意識に従ふ諸規則をあぶり出すといふ「記述的」な作業こそが外國語教育のための規範作りに有用であるといふ觀點に氣付くことになる。

規範文法と記述文法の關係について、Chao (1968: 2) が興味深い指摘をしてゐる。兩者の違ひは内容にあるのではなく、述べる形式と相對的な重點にあるのであつて、ある種の規範的な述べ立てを、例へば「ある教育水準あるいはある經濟的階級の人々はこちらの言葉を使ひ、別の階級の人々は別の言葉を使ふ」といつた具合に、記述的な述べ立てに翻譯することができるし、また逆に記述を規範の形に直すことも容易であるといふのである。東京の山の手のことば、あるいはソウル方言などといつた言語の特定の變種がある言語の標準の基盤にするといふのであれば、内容を書き出せば記述を規範に謂はば「昇格」させられる形になる。記述は原理的に網羅的ではありえず、選擇的であること、また記述はしばしば複数の主體によつて行はれ、一元的に管理されてゐないことにも注意すべきであらう。そして、記述の規範への「昇格」は必ずしも明示的ではない。それどころか、すべての記述は、人に讀まれる限りにおいて、規範的にはたらきえ (Kiselman 2001)、模範的話者を生み出す。規範や模範的話者は實際の共通語使用に影響を及ぼし、共通語使用は規範と相俟つて、逆に基盤となつた言語變種に影響を與へることさへある。「東京語が標準語になつたわけではない。標準語が東京語をつくつたのだ。」(野村 2019) といふやうな逆轉の發想が成立しうるのである。

韓國では、國立國語院によつて比較的一元的に、言語に關する諸々の標準規定が成文化されてをり、標準規定には發音が含まれてゐる。これらの點は、日本と事情が異なる。本書では「標準發音法」や『標準國語大辭典』の表記・發音をしばしば参照してゐる。このやうな母語話者のための規範に對して著者の取る態度を見てみよう。

本書は冒頭から、「mp3」を表はす標準國語大辭典の見出し語「엠펜스리」〈emp^hi swuli〉の表記はほとんど用ゐられず、「mp3」と表記されるといふ指摘をして、標準規定の批判を始めてゐる。これを皮切りに、文字と發音の關係、表記から發音を導く規則群について順に論じてゆく。さらに、標準規定の「記述的な」抜けや間違ひを多く指摘してゐる。以下にそのうちいくつかを擧げておく。

- (1) a. 標準國語大辭典に外來語や混種語の發音が示されてゐない問題 (pp.2, 67–68, 103–104)

- b. lje → nje の形態音韻過程を経て生じた nje に對する發音規定が缺けてをり、許容されるべき [ne] が標準國語大辭典の發音表示に反映されてゐない問題 (p.55)
- c. 標準發音法で、n 添加が起こる母音に抜けがある問題 (p.94)
- d. 標準發音法で、語根に接尾辭が接續する場合の n 添加規定の問題 (pp.99-100)
- e. 辭典では句單位の標準發音が調べられない問題 (p.97)

これらは標準規定の「記述的な」問題であつて、著者の言ふ通り、外國語教育の現場では發音實態を踏まへた指導が必要であらう。著者の標準規定批判を讀んでみると規範文法に關はるといふことは、規定を定め規定に従ふことに終始するといふことではないといふことがよく分かる。また、標準規定の内容を批判的に論ずる仕事は言語學者にしかできない部分が多いことも分かる。

原著者は標準發音には原則發音と許容發音があることを述べ (pp.v-vi, 65)、なかには許容發音の方が「かなり自然」(p.26) な場合があることを指摘してゐる。また標準發音と現實發音が乖離する部分が多いことに觸れながら、一般的な現實發音をも、あるいは現實發音をこそ教育すべき場合があるとし (pp.vii, 18, 55, 158, 161)、標準發音や表記の再検討の必要性に觸れたところもある (pp.158, 170)。

このやうに、本書は母語話者のための標準規定と外國語教育の規範作りを言語學的に検討する視点を與へてくれる。Jespersen の言ふ通り、外國語教育のための發音・文法は規範的に教へられるものではある。しかし、外國語教育のための發音・文法は、母語話者の言語の實態を反映した記述的に正しいものでなければならぬといふ考へは、むしろ現代的な外國語教育界ではスタンダードとも言へるかもしれない。Chao の言ひ方に倣へば「母語として話す一般の人々はこちらの言葉 (現實發音) を使ひ、アナウンサーを職業にする人は別の言葉 (標準發音) を使ふ」といふ記述的な述べ立てができるやうにも思ふ。現代的な外國語教育における規範はむしろ、記述との距離がほとんどないやうにさへ見える。

3 本書の特徴、邦譯版の特徴

著者の語り口は、きつぱりと斷言するリズムの良い部分も多いが、決して頭ごなしではなく、讀者と議論を樂しむやうなところもある。例へば子音體系の把へ方について三つの可能性 (pp.28, 31, 32) を提示したり*1、「二方向の鼻音化」について二つの假説 (p.139) を吟味したりする議論は、學術書に近い。例示も豊富である。

讀み手を引き付ける工夫も隨所になされてをり、第 II 部の冒頭にある、表記と發音の乖

*1 このうち表 8, 9 の下二段には用語の誤植や配列の誤りがあるが他の表と突き合はせれば修正は容易である。

離に気づいてゆく学習者の體驗に擬したコラムは、その後に取り上げられる主要なトピックを入れ込んであつてみごとである。逆行同化を父と子の關係に喩へる秀逸な比喩などは原著者の平素の楽しい口ぶりを思ひ起こさせる。

翻譯作業は原著者との緊密な連絡を取りながら行はれてをり、原著者も日本語を充分にご存知の方だといふこともあり、翻譯は全體に信賴できる。また、原著よりも形式的に整つてゐる印象を受けた。例へば原著は表や圖に通し番號が振られてゐないものがあるが、邦譯では一部の「假説」、例示、規則の提示を除けばほとんどに番號が付されてゐる。

本書は本文中で章・節の相互参照をあまりしてゐないが、原書に比べて邦譯の索引が増やされてをり、使ひ勝手も良くなつてゐる。例へば、p.68 で定義された「|系母音」が音韻過程の説明のために言及されるのは p.107 であるが、本文には特に定義部を参照するための情報がない。邦譯の索引ではどちらのページにも辿り着くことができるやうになつてゐる。原書の索引では定義部のページしか示されてゐないので、讀後に「|系母音」がなにを説明するための概念だつたか忘れてしまつたら、再び探し出すのは難しい。

4 文字と發音

韓國の標準語正書法は現代的な形態・音韻分析のもとに設定された基底形に基づいてゐる。本書は音素の習得が終はつたあとに、文字を見て音素列に讀み直す方法に取り組む段階で教授すべき部分を主に取り上げてゐる。どこまでが形態音韻プロセスの問題なのか、どこからが正書法上の問題なのか、言語學的な理窟の上での正しさと語學教育における便宜上の説得力との折合をつけながら論じる原著者の手竝は鮮やかである。ただ、個別の問題として取り上げられたものの中に、別の切り口からまとめ上げられるものもあるやうに思はれるので、評者の見方を示してみる。

4.1 子音字母の名稱

本書では末音 h をもつ唯一の名詞として子音字母 <h> の名稱である <hiuh> を取り上げて一定の紙幅を割いて説明してゐる (pp.120-1)。<hiuh> の發音に關する問題は、いくつかのハンゲルの子音字母に對して基底の語形のパタンとしてありえない音形が與へられてゐるといふことに根差すものである。子音字母 (C) は基本的に <CiuC> の型にはめられて名付けられてゐる。視覺的なパタンとしては分かりやすいが、名詞の語末に起こりうる子音 (群) は限られてをり、少なくとも <h> <t> の名稱 <hiuh> と <tikut> の表記・發音の對應が破格になることは避けられない。基底形では名詞の語末にありえないため、原理的に發音できないか、一般規則から導出される表層の變異パタンがほかに見当たらないやうな

名詞なのである*2。これらの名称は実際の発音においては、末音を基底の//s//に読み替へて音形を導出することになるといふのが簡便ながら正確な説明になるだらう。その他、〈tʰ〉、〈tɕ〉、〈tɕʰ〉は名詞末音としてありうる子音の字母であるが、これらの名称でも、同じことが起こる。『標準国語大辞典』の発音欄の表示からも、語末音の//s//読み替へからの導出が標準発音にあたることが明らかであり、以上の問題は h 特有の問題ではなく、子音字母の名称の問題として一括して扱ふことができさうである (Martin 1992: 22)。

4.2 「濃音化 2」

無標の阻害音が喉頭音化する「濃音化」の現象はいくつかの別のタイプの条件に従ふ複数のプロセスに分けて考へなければならぬ。本書では pp.111-で三種類の濃音化に分類して解説してゐるが、条件の分類方式としては少なめの部類に属すると考へる。分類を増やせば良いといふわけでもないかもしれないが、本書の「濃音化 2」はさまざまな場合を一つにまとめて例外的な部類とするもののやうであり、もう少し細かく整理する方法もある*3。

まづ、漢語において、音節末 1 に続く「舌端音」の平音 (pp.31-32) が濃音化する現象をここから独立させて論じることができる。さうすれば、〈pal[?]tal〉「發達」、〈kal[?]tuŋ〉「葛藤」、〈pal[?]tɕan〉「發展」(以上、p.115)、〈tɕʰul[?]sin〉「出身」(p.116) などの発音は規則通りとも言ひうる。

用言子音語幹*4の後続要素の初頭音が濃音化するといふことも、個別の語幹末音に即して説明するのではなく、一つの規則にまとめることができる。本書で「濃音化 3」(p.119) に分類される /h/ と /s/ の連続は、これの特殊な場合と扱へることもできる。

〈jʌtʌlp〉「八つ」には特殊な振舞があり、個別の記述が必要になる。しかし、〈jʌtʌlp〉に後続する要素の初頭子音の濃音化は (p.167)、lp の複パッチムの特別な例とする代わりに、l を含む末音をもつ他の固有数詞と関連付けることもできる。

*2 濃音 〈sup>?</sup>p〉、〈sup>?</sup>t〉、〈sup>?</sup>s〉、〈sup>?</sup>tɕ〉は名詞の語末に来ることがないが、濃音字母は對應する平音字母の名称に基づいた複合語の名称をもつため、ここでいふ「原理的に発音できない」名付けに直接關はらない。

*3 キム＝ムリム・キム＝オギョン (2009: 418-420) では濃音化を 5 種類に、油谷他 (2018: 1986) では 8 種類に細分してゐる。本評の視点と關聯する語學教科書である松尾他 (2012: 16-17, 27-29, 37-38) も 8 種類に分類してゐる。

*4 用言子音語幹からは 1 終はりの用言語幹を子音語幹から除く必要がある (cf. p.118)。用言子音語幹の後続要素の濃音化は、本書では m, n (以上、p.117), h (p.119), 複パッチム (pp.153, 156, 159-60, 164, 168, 170, 172, 174, 176-7) で説明されてゐる。

4.3 「切音」及び接尾辭-hi に関する形態音韻現象

上の〈jʌtʌlp〉「八つ」もさうだが、本書では、基底の語幹末子音連続表記「複パッチム」について第 III 部にまとめて記述する方式を取つてゐる。複パッチムはたしかに語彙的に取り上げなければ難しい部分もある。通讀するのではなく折々に参照するための本としては、複パッチムを別立てにした意義はあると考へる。しかし、情報が分散してしまつたところもあるやうに思ふ。

例へば原著者は通常の連音化と「切音」後の連音化の違いについて幾度も強調してゐる。本書では「終声規則」(p.74)は阻害音の諸特徴が音節末位置で中和する現象のことを言ひ、音節末子音連続の單子音化(「複パッチムの單パッチム化」p.150)をこれとは別に取り上げてゐる。「切音」とは、「一度切つて発音」(p.105)する現象とするものだが、本書中での用法を辿ると上の兩者(音節末での阻害音中和と單子音化)を合はせたものに相當すると言つて良い。この「切音」に関する情報は、「複パッチム」の部が分けてあるために、分散してゐる。

本書の構成の特徴上、接尾辭-hi に関する形態音韻現象(切音、激音化、口蓋化)の説明もやはり第 II 部と第 III 部の各子音連続の項目に分けて説明されることになる。「切音」と接尾辭-hi に関する記述はそれぞれ少々異なるが、システムを理解するためには、p.161で-lk 終りの語根に-hi が後續すると「その境界では切音現象が起こらない」とするのが最も参考になる。初頭が綴り字上 h で始まる接尾辭は先行する音節の基底の末子音(群)を單純化しないので、-l-hi や -k-hi といふステップは踏まずに全ての素性が活かされて /-lk^hi/ となる。他の子音終りの語根に接尾辭-hi が續く場合も同様の扱ひが適當だが、-ntɕ 語根に-hi が後續する際に /-ntɕ^hi/ となることについて切音が起こらない例外であるかのやうに述べたり(p.154)、-tɕ 語根に-hi が後續すると /-tɕ^hi/ となるが切音(-t-hi)を経て-t^hi となるステップを踏んだやうに表示してゐる(p.127)のは、最終的な音聲には影響がないものの、過程の説明としては一貫性がないやうにみえる。

一般に助詞は接尾辭や語尾と同様の振舞をするが、名詞に/=hako/「〜と」(共同)や /=hant^he/「〜に」(與格、口語調)が續く際に「切音」が起こる。この點、初頭に h をもつ助詞は、用言語根に付く接尾辭-hi と對照的である。本書にもこのことが繰り返して述べられてゐるが、全體としては-hi の特殊性として説明されてゐる。逆に、-hi の前で切音が起こらないことが本則だと考へれば、助詞/=hako/ や /=hant^he/ が自立語由來であるために例外的に「切音」が義務的になるといふ風にも把へることが可能だと考へる。

5 独自の観察

5.1 子音連続について

原著者が、興味深い観察や記述を提出してある部分がある。例へばコラム 3(p.114)では重子音と単一の濃音の区別は表記上なしうるが、母語話者の感覚としては困難であることを述べている。綴り字発音に傾かなければ当然の結論とも見えるが(キム＝ユボム・オ＝ジェヒョク 2013)、母語話者の実感が示されると安心できる。

同様に、/l/のあとで/s/と/l²s/の区別が困難であること(p.177)なども、あまり言及されることがないやうに思ふ。例へば Martin (1992: 30) は/l²s/と/l¹s/の子音連続がともに存在するものとしてリストしながら例はあげず、「/l¹s/については対立を見出すことは易しくない。全てのケースを/l²s/に強化する話者もいるのではないかと思ふ」*⁵(Martin 1992: 31)としてゐる*⁶。また、武田他(1999)も/l/が先行した際の/s/と/l²s/の判断が困難であつたといふが、どちらも非母語話者の報告である。

5.2 流音の音聲について

朝鮮語の流音音素 /l/ は発話初頭や開音節に後続する音節初頭で弾き音 [r] で実現し、音節末や /l/ に後続する音節初頭で側面音 [l] で実現する。この一般的な把握は、金鍾徳(2018)によつて一部否定されてゐるが、教育目的を旨とするためか、本書でも採用されてゐる。

朝鮮語の音節末の/l/や/l.l/の(音節境界をまたぐ)連続は側面音で実現されるが、その調音位置については自由変異、条件変異が多い。本書では/pjallo/「別に」の/l/のやうな発音について、興味深い観察をしてゐる。「舌端を硬口蓋部分に付け」*⁷、「舌を内側に滑らせるやうに若干引っ込めてからすぐに外側へ強く押し出す」(p.52)といふのである。

近年、調音動作の実態が最新の技術によつて観察されるやうになつてきてをり、/l/にはそり舌の異音があることがやうやく認知される兆しがみえてきた(Hwang et al. 2019)。そもそも/l/の主要な異音にそり舌の [l̠] が含まれることは少なくとも 20 世紀中葉にすでに指摘

*⁵ “For /l¹s/ it is not so easy to find contrasts, and I suspect there may be Koreans who reinforce all cases to … lqs…”(Martin 1992: 31)

*⁶ Martin (1951, 1992) は他のことに關しては信頼のおける音素分析であり、子音連続の認定に非常に抑制的である。例へば/l/を先行要素とする音連続は一切認めてゐない。Martin (1951) は、/l¹s/と/l²s/については両方を認めて例を擧げてゐる。/l¹s/の例は「七十」<te^hilsip>であり、音聲的には [te^hil²cip] のはずだから、少なくとも Martin (1951) の例示はなんらかのミスではないか。Martin (1992) は例示を撤回した體である。

*⁷ 本著の「舌端」は舌尖から舌端にわたる部分のカバータームである。また「硬口蓋」は廣い調音位置を指してゐる。

されてきたが、韓国の學界ではこれまであまり注目されてこなかったやうである。Lukoff (1945: 139) は「子音の前あるいは語末の /l/ は、母音 u の後で、他の母音の後におけるよりも共鳴するやうに聞こえることに注意されたい。この位置では舌端はそれほど平たかない。」*8、Martin (1951) は「無開放の音節末の /l/: 舌尖の裏側が齒槽 (また上の齒) にあたり、兩脇は開いてゐる。」*9 と観察をしてをり、この二資料を参照した Hockett (1955: 121) は朝鮮語の /l/ をそり舌 (retroflex) としてゐる。Martin (1992: 28) でも「そり舌」(retroflex) といふ用語こそ使つてゐないが「音節末では /l/ は無開放であり、舌は開放された場合の調音点からそれを越えたところにわたるあたりに反り返る」*10 と、更に明確にそり舌音の調音動作を記述してゐる。これらと獨立に、服部 (1951: 98) もそり舌の有聲側面音が朝鮮語の「[mu]〈水〉などに見られる」とし、同じ観察が Umeda (1957) にも引き繼がれてゐる。その他、Lee (1993, 1999); 野間 (2007) のやうに、流音にそり舌の異音を認めることが全く見られないわけではないが、最近のもので、母語話者による内省として、本書ほど詳しい調音動作を記したものは少ないのではないか。ただ、原著者は上の調音器官 (廣い意味の「硬口蓋」) だけに注目して「硬口蓋側面音」と呼んでゐる。本著における下の調音器官 (舌) の調音動作の記述とここに示した側面音の記述を比べれば、どれもそり舌のものであることが明らかである。/l/ の音聲を [ʌʌ] (p.52) とするのは [ʌʌ] が適切だと考へられる*11。

そり舌の程度、個人差や出現環境の究明は今後の調査に俟たねばならないが、[mu]〈水〉は相當に多く聞かれる發音である。

5.3 四字熟語の n 挿入

前の音節に末音があり、次の音節の初頭に前舌特徴をもつ母音が現はれる場合、間に n(ㄴ) が挿入される現象を n 添加 (本書での用語)、あるいは n 挿入と呼ぶ。n 挿入が起こるのは後部要素が自立語に由來する場合はほとんどだが、子音終はりの要素と後續する終助

*8 “Note that after the vowel u, the /l/ before a consonant, or at the end of the word, may sound more resonant than after other vowels. In this position, the blade of the tongue is a bit less flat.” (Lukoff 1945: 139)

*9 “[U]nreleased syllable-final /l/: the under-side of the tongue tip touches the alveolar ridge (and the upper teeth), with an opening on each side.” (Martin 1951) ここでは書評の對象の原著者の主張に従ひ alveolar ridge を「齒槽」と譯出した。音聲學で普通にいふところの「齒莖」のことである。

*10 “At the end of a syllable, the /l/ is unreleased and the tongue curls up around and beyond the point where it would have been released[.]” (Martin 1992: 28)

*11 口蓋化された側面音は、/i/ または /j/ の前ではたしかに出る。これを [ʌ] と音聲表記する例もある (Kim-Renaud 1974; Lee 1993, 1999)。IPA で [ʌ] と表記すべき前舌・硬口蓋の典型的な發音であれば、前舌母音の發音の特徴について本書で述べられてゐる如く「舌が下の齒または [下] の齒の齒莖付近に当たる」(p.10) はずであるが、これらの表記ではそこまで硬口蓋よりの調音を示すものではなく、齒莖硬口蓋の [ʌ] あるいは [ʌ] と表はすべき程度の口蓋化音を表はさうとしたものではないか。いづれにせよ、本書の指摘するそり舌特徴とは環境も全く異なるものである。

詞/=jo/の間にも現れる(後藤 2013; 辻野 2013)。

本書では「樂山樂水」〈jo.san.jo.su〉の2音節目と3音節目の間にnが挿入され/jo.san.njo.su/ [josan^hn^hos^hu] となることについて、「単純語内で [ɿ](n) が出現するものを、なぜ標準発音と認めるのかについての理由はわからない」(p.98)としてゐる。たしかにこの特定の四字熟語(故事成語)は日常語彙に照らして話者が分析的な把握をするのは難しく、いはば大人の教養が求められる。「音樂」〈umak〉の「樂」〈ak〉でも「快樂」〈k^hwelak〉や「樂觀」〈nakkwan〉の「樂」〈(l/n)ak〉でもない、「樂」〈jo〉といふ形態素はこの四字熟語特有のものといへるであらう。しかし、その意味を十分に理解してゐないまま、この表現が発話されることがありうらうだらうか。萬が一、その意味を十分に理解してゐないまま発話を促されたとしても、〈josan〉と〈josu〉に分けられる成語だといふ認識のもとに発音されないだらうか。標準國語大辭典では〈josan〉と〈josu〉の二字ごとのまとまりの間にハイフンを入れて、形態境界があるものとみなしてゐるが、故なきことでもないやうに思はれる。語源的にも正しいし、n挿入といふ音韻語境界をターゲットにする共時的な現象が、その語源的境界をも環境としてゐるのであれば、境界は單に語源の問題ではなく、共時態に生き残つてゐると言へるのではなからうか(cf. 千田 2012)。

キ=セグワン(1999)は、四字熟語の多くが二つの二音節語の結合をなすこと、そしてそのパターンが「口尙乳臭」〈ku.saj.ju.tc^hwi〉のやうな、本來二音節づつのまとまりをなさない四字熟語にも適用されて/kusaj-<n>jutc^hy/とn挿入規則を受けることがあることを指摘してゐる。この現象については簡単に觸れられてゐるだけで、詳しい記述は管見の限り見当たらないが、ウェブ版の標準國語大辭典の検索を行ふと、(辭典が記述的に妥當であるならば)おほむねこの指摘の通りの傾向が見て取れる。四字熟語の二音節目に末音があり、三音節目の初頭に前舌特徴をもつ母音が現はれる場合を100程度検索した結果、次のことが分かつた。

- (2) a. 二字ごとのまとまりの間にハイフンで形態素境界を示されたものが半分以上である。
- b. 二字ごとに境界を示された四字熟語については、後部要素が/j/始まりであれば、ほとんどの場合n挿入が起こつた発音が示されてゐる。
- c. 二字ごとに境界を示されてゐない四字熟語でも、三音節目が/j/始まりの場合には、その前(中央位置)でn挿入が起こつた発音が標準とされてゐるものがほとんどである。
- d. 三音節目が/j/始まりであれば、ほとんどの場合、その前(中央位置)でn挿入が起

こらないものが標準発音として示されてゐる。

つまり、四字熟語における標準発音の認め方は、形態素境界の認め方に關はず、相當に一貫してゐる(補論を参照いただきたい)。

6 「内破」について

翻譯は全般的に信賴できるが、いくつかの點は、翻譯書特有の問題を含んでゐるやうに思ふ。例へば alveolar(英)に對して「齒槽」といふ表現をあてるのは日本語では新奇に過ぎるのではないかと心配にもなる。

なかでも、「内破音」といふ用語を避けて「不破音が正しい」(p.36)とするのは日本の音聲學の用語法には馴染まないのではないだらうか。西洋語では implosive が二つの音聲學的概念にあてられてをり、内破の意味では「無開放」(英: unreleased)などと表現するやうになつてきてゐるやうだが、日本語では「内破音」(無開放音)と「入破音」とは明確に區別するやうに思ふ*12。また Grammont (1933: 38-39)に從つて、服部 (1951: 177)が「無聲の兩唇閉鎖音のうち、APMA 或は AP におけるやうに、入りわたりのオトが強く聞え出わたりが全然ないか、あつてもそのオトが極めて弱いものを内破音といい、AMPA 或は PA におけるやうに出わたりのオトが強く聞え、入りわたりが全然ないか、あつてもそのオトが極めて弱いものを外破音という。」といふやうに、外破と内破が對概念で用ゐられることがあり、「内破」がむしろ用語として適切な文脈もある。

たしかに韓國では「内破音」(내파음)を無開放音の意味で使用する(李基文他 1984; イ＝ドンファ 2001)のは近年では少數派になつてきてゐるやうであり、「未破」(미파)を主に使用するもの(キム＝ギョンア 2000)、「不破」(불파)を主に使用するもの(ペ＝ジュチェ 2011)、これら二つの用語を併記するもの(カン＝オクミ 2011)が多く見られるやうになつてきてゐる。「内破音」は入破音を意味するとして、この用語を無開放の意味で使ふのは間違ひと明言される場合もある(ペ＝ジュチェ 2011)。ペ＝ジュチェ (2011: 39)では Laver (1994: 172-3, 359-60)を引いて説明してゐるので英語の用語習慣に從ふ趣旨が明確である*13。日本でも學術用語の多くが英語を中心とした西洋語から輸入されてをり、言語學者

*12 亀井他 (1996: 1029, 1041-1042)では「内破音」及び「入破音」の解説で、(日本語ではなく) implosive といふ用語が兩義的であることを注意を促してゐる。辭典の記述は、どの西洋語でこの用語が兩義的なのか明示的でない。英獨佛などの用語習慣に照らし合はせて兩義的だといふことではないか。服部 (1951: 166)の註5に英獨佛語におけるこの用語の用法が示されてゐるのが参考になる。

*13 評者はペ＝ジュチェ (2011)が Laver (1994)を引用した理由がよく理解できなかつた。Laver (1994: 172-3, 359-60)では單に入破音 (implosive) と開放 (release)、無開放 (non-release) について記述するもので、用語法についての議論は見当たらない。英語における用語 implosive によつて内破音の意味を負はせることの不適切性を説いた Lloyd (1899: 5)に由來し、日本では橋本萬太郎が受容した(橋本 1959; Hashimoto 1960)、

同士の会話によくあるやうに「インプローブ」といふ臨時借用の片假名語を使えば入破音の意味で理解されることにはならう。しかし、「内破音」といふ用語の使用に入破音の意味を感じ取るまで英語からの影響が及ぶには至つてゐないのではないか。既存の「パッチム」などに加へ、「不破」を導入して個別言語の研究・教育分野のジャーゴンを増やすことが適切かどうか、今後の動向も注目される。

本書では音節末/p/に終聲規則が適用されるのか、といふ問ひが立てられてゐる (p.77)。中和現象に對して原音素を立てるか否かといふやうな、古典的な(形態)音素論の大問題である。この問題への本書での議論は音節末での阻害音の無開放化と結び付けられてゐる。

音節末位置の阻害音の典型的な音が無開放音であることは教育的な觀點からは否定する必要はないと考へる。この發音様式に馴染みのない外國語話者に對する語學教育の方法論としては音節末阻害音の無開放性を強調することは當然ともいへる。また、韓國では Kim-Renaud (1974: 112) や李基文他 (1984: 85)、キム＝ギョンア (2000: 202) など、音節末における阻害音の喉頭特徴の中和現象を無開放性と関連付ける論者が多いやうで、音韻論の教科書にはその解釋による規則や制約の立て方の實例が示されてゐる (キム＝ムリム・キム＝オギョン 2009: 403–409)。この背景を踏まへれば、原著者個人への批判とはなりえないが、議論は決着を見てゐない。チェ＝ミョンオク (2011: 94–95) やペ＝ジュチェ (2008: 156–158) は平破裂音素が(無開放の)閉鎖音で實現するのは音聲的なものであつて音韻的なものではないとして、音節末での喉頭特徴中和を「平破裂音素化」といふ音韻現象だと扱へてゐるが、評者にもこの方が穩當であるやうに見える。このやうな、音韻論的な議論のなかで、音節末の閉鎖音が開放される場合があることに言及するものは見当たらないが、音韻論と音聲學の世界の交流不足であらうか。

音聲學的には、朝鮮語の音節末阻害音が外破を伴ふ場合があることは知られてゐる。音節末の/k/ と /p/ は典型的には齒莖摩擦音¹⁴/s/が続く場合には開放され*¹⁴、はつきりと噪音が聞こえるほか、齒莖摩擦音でなくとも調音位置の異なる阻害音が後続すれば開放音になることがある (ヤン＝スニム 2002)。齒莖摩擦音に先行する/k/ と /p/ については、音響的に破裂のスパイクフィルを確認することもできる (武田他 1999)*¹⁵。このやうに、典型的には齒

aplosive といふ用語の、韓國における導入の研究史を辿らなければならないのではないか。なほ、橋本 (1959) は本文の *implosive* について註に「所謂「入破音」K. L. Pike の言う *implosive* で、M. Grammont の *implosif*(内破音)とは異なる。以下、後者に対しては *aplosive* なる名称を用いる。」としてをり、橋本の用語法において、日本語の「入破音」と「内破音」の使ひ分けには混乱は見られない。

*¹⁴ 齒莖摩擦音に先行する/l/は音聲的には閉鎖が確認されないといふ報告が多い (朴惠淑 1982; 武田他 1999)。これを/l^hs/の實現と考へるか、音韻レベルで脱落の起こつた/l^hs/と考へるかは、本書のコラム 3(p.114)とも關聯し、キム＝ユボム・オ＝ジェヒョク (2013); キム＝ムリム・キム＝オギョン (2009) などの分析や議論が参考になる。

*¹⁵ さらにいへば朝鮮語の音節末阻害音が完全なる無開放音だといふ神話にメスを入れる研究もある。Kim and

莖摩擦音の前で、開放音で實現されるケースにおいても、阻害音の喉頭特徴中和は起こる。阻害音の音節末における中和と無開放性を関連づけてしまふと、一度無開放音になつた閉鎖音を齒莖摩擦音の前で再び破裂音化させる過程を設けなければいけなくなる。過程を設けられない最適性理論では複雑な仕組みを考へ出さなければ説明が難しくなるであらう。

7 その他

本書はこの言語の發音に關して必ずしも網羅的ではない。平音の有聲性などについては詳しく言及されてをらず (cf. p.145)、第 I 部を除けば文字・表記との關係に即して問題となりうる發音を取り上げてゐるため、入門の教育ではなく初・中級以降の教育に主に關する内容といへよう。

なにごとにも完璧は期し難い。主として語彙的な、偶發的ともいへる原因により規則の適用環境に生起しない音について、規則の対象に入れたり (p.123 (^ʔs)) 入れなかつたり (pp.124 (p), 131 (^ʔp), 132 (^ʔt, ^ʔtc)) してゐるのは少し一貫性に缺けるやうに見える。p.138 ではあまり明示的でないが、二方向の鼻音化の先行要素にはいくつかの字母が見えないので規則の対象にしない方針だつたのであらう。だとすると、表に見える ^ʔs は消し忘れなのではないか。

調音位置に關する記述に正確性に缺ける部分があるやうにも思ふ。/s/や^ʔs/が齒音だとする (pp.28, 43) のは「大部分の韓国語音韻論者が同意するはず」(p.28) ではないと思はれるし、「前舌と硬口蓋がぶつか [る]」(p.44) 子音があるとすれば^{*16}典型的には前舌母音と同様に「下の齒または下の齒の齒莖付近に当たる」(p.10) はずだが、そのやうな異音が一般的に見られるだらうか。/h/の發音について喉頭蓋と関連づける〈コラム 1〉(pp.48–49) は全體として理解できなかつた。

8 をはりに

本書はもともと語學教育の専門家、及び専門家の卵を讀者層に想定して書かれてゐる。本書の魅力は、表記と發音の乖離の激しいこの言語において、現場の教員が状況を正しく把握した上で、學生たちに説明するための適切なことばを與へてくれることであらう。そのやうな目的で、また参照する利便性を第一に考へれば、本書の構成は適切であり、本評

Jongman (1996) は大半の語末子音に開放音が確認されることを報告してをり、ヤン＝スニム (2005) は阻害音連続の先行子音の開放噪音を削除した音聲を聞かせる實驗をすると音節末音を認識することが困難になるといふ結果を示してゐる。

^{*16} p.28 では舌端・硬口蓋で、普通は前端・齒莖硬口蓋あるいは舌端・硬口蓋齒莖と記述される子音である。

で論じたいいくつかの理窟の側面は揚げ足取りにすぎないかもしれない。中級以上の学習者が手元において参照するのも薦められ、幅広い読者層がさまざまな観点から関心をもつて読むことができる。

ある種の実用書の体裁をとつてはゐるものの、専門家にも、大いに刺戟を與へうる一書である。標準規定の批判や、理論的な考察なども本書において重要な位置を占めてゐる。この言語の音韻論に関心のある向きにも、—ハンゲルを知らなければ新手の音聲記號だと思つてこの機会に覺えてしまへばよい—興味深く讀める内容をもつてゐる。

補論 — 標準國語大辭典における四字熟語と中央の位置における n 挿入

標準國語大辭典において、四字熟語は二つの音韻語の結合に近いものとして標準發音を定められてゐる可能性がある。そもそも形態境界を二音節目と三音節目の間、つまり中央に付してゐるものが多く、その場合は二つのなんらかの單位の結合と認めてゐることが明らかである。興味深いのは、形態境界の認め方に關はず、四字熟語では中央の位置における n 挿入された發音が標準發音とされる傾向が強いといふことである。n 挿入は一般に、後續要素が自立語 (由來) である場合に起こる。

まづ、二字ごとのまとまりの間に境界を示された四字熟語を見てゆく。前部要素に末子音があり、後部要素が j/始まりといふこの場合、n 挿入が起こりうる環境においては、n 挿入が起こるものとして辭典に發音が記載されてゐることが多い。次に前部要素の末音が n の場合 (3)、ŋ の場合 (4)、それ以外の子音の場合 (5) に分けて例示する。ハングルの翻字には <n> として n 挿入の位置を併せて示すが、n 挿入以外の過程が複雑にからまる様子を示すところでの目的からは却つて煩雑に見えるので最終的な音聲表示は省く。

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| (3) a. 「鷄卵有骨」 <kjelan-<n>jukol> | h. 「繁文縟禮」 <paŋmun-<n>joklje> |
| b. 「乞人憐天」 <kalin-<n>jantɕʰan> | i. 「上善若水」 <saŋsan-<n>jaksu> |
| c. 「孤根弱植」 <kokun-<n>jaksik> | j. 「深山幽谷」 <simsan-<n>jukok> |
| d. 「孤雲野鶴」 <koun-<n>jahak> | k. 「樂山樂水」 <josan-<n>josu> |
| e. 「巧言令色」 <kjoan-<n>jɒŋsek> | l. 「連戰連勝」 <jantɕan-<n>jansuŋ> |
| f. 「君臣有義」 <kunsin-<n>juwi> | m. 「青山流水」 <tɕʰanŋsan-<n>jusu> |
| g. 「博文約禮」 <pakmun-<n>jaklje> | n. 「忠言逆耳」 <tɕʰuŋan-<n>jaki> |
| | |
| (4) a. 「美風良俗」 <mipʰuŋ-<n>jaŋsok> | e. 「言中有骨」 <antɕuŋ-<n>jukol> |
| b. 「門庭若市」 <muntɕanŋ-<n>jaksi> | f. 「晝耕夜讀」 <tɕukjaŋ-<n>jatok> |
| c. 「孫康映雪」 <sonkaŋ-<n>janŋsal> | g. 「天生緣分」 <tɕʰansɛŋ-<n>janpun> |
| d. 「始終如一」 <sitɕoŋ-<n>jail> | |
| | |
| (5) a. 「九折羊腸」 <kutɕal-<n>jaŋtɕaŋ> | c. 「生殺與奪」 <seŋsal-<n>jalʰal> |
| b. 「三日遊街」 <samil-<n>juka> | d. 「光陰如箭」 <kwaŋum-<n>jatɕan> |

- e. 「衣錦夜行」〈uikuum-⟨n⟩jahεŋ〉 g. 「面色如土」〈mjʌnsek-⟨n⟩jʌtʰo〉
 f. 「精金良玉」〈tɕʌŋkuum-⟨n⟩jaŋok〉 h. 「陰德陽報」〈umtʌk-⟨n⟩jaŋpo〉

次は、二字ごとのまとまりの間に境界を示された四字熟語で、前部要素に末子音があり後部要素が/j/で始まるもののうち、n 挿入が起こらないものとして発音表示されてあるものである。次の三例が見つかった。

- (6) a. 「死生有命」〈sasεŋ-jumjʌŋ〉 c. 「五臟六腑」〈otɕaŋ-jukpu〉
 b. 「殺生有擇」〈salsεŋ-jutʰɛk〉

例が少ないのは明らかだと思ふ。評者の調査はあたりをつけるといふ程度なのでこれらの例外の理由について詳細なコメントはできないが、音列のパタンや形態素の特徴に氣を付けるべきかもしれない。

次に標準國語大辭典では前の二字と後の二字の間に形態素境界が示されてゐないものを見る。辭典の基準に若干曖昧なところがあるやうにも思はれ、実際にはなんらかの境界を認めても良ささうなものもあるため、境界の候補を「+」で示す。先程と同様、例示は前二音節の末音が n の場合 (7)、ŋ の場合 (8)、それ以外の子音の場合 (9) に分けてある。

- (7) a. 「愛人如己」〈ein+⟨n⟩jʌki〉 c. 「一面如舊」〈ilmjʌŋ+⟨n⟩jʌku〉
 b. 「用錢如水」〈joŋtɕʌŋ+⟨n⟩jʌsu〉
- (8) a. 「口尙乳臭」〈ku+[saŋ+⟨n⟩jutɕʰwi]〉 e. 「勢窮力盡」〈sekuŋ+⟨n⟩jʌktɕin〉
 b. 「勸上搖木」〈kwʌnsaŋ+⟨n⟩jomok〉 f. 「魚東肉西」〈ʌtoŋ+⟨n⟩juksʌ〉
 c. 「薄氷如臨」〈pakpiŋ+⟨n⟩jʌlim〉 g. 「如狂如醉」〈jʌkwaŋ+⟨n⟩jʌtɕʰwi〉
 d. 「憑公營私」〈piŋkoŋ+⟨n⟩jʌŋsa〉
- (9) a. 「生不如死」〈sεŋ+[pul+⟨n⟩jʌsa]〉 c. 「三十六計」〈samsip⟨n⟩juk-kje〉
 b. 「不得要領」〈pu+[tuuk+⟨n⟩joljʌŋ]〉

以上の内、「三十六計」の「六」の初頭が n 挿入の対象になるのは、この特定の漢數詞「六」の振舞に關はるもので、四字熟語全體の傾向とは切り離す必要があるかもしれない。またそもそも中央位置に境界を認めても良ささうなものがある。いづれにせよ、形態境界が辭典に示されてゐなくても、中央位置で n 挿入が起こるものとされてゐる場合が多い。

次は、標準國語大辭典に二字ごとのまとまりが示されてをらず、二音節目と三音節目の境界の子音 + ⟨j⟩ に n 挿入が示されてゐないものである。

- (10) a. 「一目瞭然」 ⟨ilmok+jojʌn⟩ c. 「物各有主」 ⟨mul+[kak+jutɕu]⟩
 b. 「斷不饒貸」 ⟨tan+[pul+jote]⟩ d. 「事不如意」 ⟨sa+[pul+jʌwi]⟩

ここでも、音列のパタンや形態素の傾向、及び構造が氣になるが、あまり確定的なことは言ひにくい。ただ、形態境界が辭典に示されてゐないものでも、このやうに標準發音に三音節目の n 挿入を認めない例は、少ない。

ここまてで言ひうることは、標準國語大辭典では四字熟語の二音節目と三音節目の間に形態境界を認めてゐる場合が半数以上にのぼるであらうこと、境界を認めるかどうかに関らず、この中央位置に C+j の連続が見られる場合に、n 挿入された標準發音と示すことが壓倒的に多いといふことである。隠れた標準發音の原則といふべきかもしれない。キ=セグワン (1999) が指摘する通りだが、そもそも四字熟語の多くが二つの二音節語の結合をなしてをり、そのパタンが本來二音節づつのまとまりをなさない四字熟語にも適用されてゐるわけである。

現實發音も氣になるところであるが、これは揺れの幅が大きいことが豫測される。辻野 (2014, 2016) は標準國語大辭典の標準發音に見られる n 挿入と、調査した實現實態を突き合はせてゐる。辻野 (2014) は上に引いた四字熟語のうち四例 (4a, 5a, 8f, 10a) を調査の對象にしてゐる。そのうち三例は n 挿入が起こつた標準發音をもつものであるが、現實發音においては (5a) が 100.0%、(8f) が 42.4%、(4a) が 36.4% と異なる割合で n 挿入が起こつてゐたといふ結果を示してゐる。一方で一例 (10a) は標準發音では n 挿入が起こらないことになつてゐるが 54.5% の被験者が n 挿入を起こした發音をしたといふ。

漢語では C+i の結び付きで n 挿入が起こりにくいことが知られてゐる。上と似たやうな環境だが、四字熟語の二音節目と三音節目が C+i の結び付きになつてゐる場合は、標準發音もほぼ n 挿入が起こらないものとされてゐる。やはり二字ごとに境界が示されてゐるものが多い。n+i の場合 (11)、ŋ+i の場合 (12)、その他の子音 +i の場合 (13) に標準發音で n 挿入が起こらないものをまづ擧げる。

- (11) a. 「乾坤一色」 ⟨kʌnkon-ilsek⟩ d. 「報怨以德」 ⟨powʌn-itʌk⟩
 b. 「乾坤一擲」 ⟨kʌnkon-iltɕʰʌk⟩ e. 「事君以忠」 ⟨sakun-itɕʰuj⟩
 c. 「鷄群一鶴」 ⟨kjekun-ilhak⟩ f. 「昇天入地」 ⟨suŋtɕʰʌn-iptɕi⟩

- g. 「我田引水」〈atɕʌn-insu〉 i. 「千篇一律」〈tɕʰʌnpʰjʌn-illjul〉
- h. 「頂門一鍼」〈tɕʌŋmun-iltɕʰim〉
- (12) a. 「男中一色」〈namtɕuŋ-ilsɕk〉 e. 「升堂入室」〈suŋtaŋ-ipsil〉
- b. 「同工異曲」〈toŋkoŋ-ikok〉 f. 「始終一貫」〈sitɕoŋ-ilkwan〉
- c. 「同牀異夢」〈toŋsaŋ-imonŋ〉 g. 「十盲一杖」〈sipmɛŋ-iltɕaŋ〉
- d. 「不省人事」〈pulsɛŋ-insa〉 h. 「出將入相」〈tɕʰultɕaŋ-ipsaŋ〉
- (13) a. 「大喝一聲」〈tɕkal-ilsʌŋ〉 c. 「小心翼翼」〈sosim-ikik〉
- b. 「物心一如」〈mulsim-iljʌ〉 d. 「張三李四」〈tɕaŋsam-isa〉

次は二字ごとのまとまりがしめされてゐないものであるが、形態構造の認め方とは関係なく、標準発音には n 挿入を示してゐない。

- (14) a. 「老當益壯」〈no+taŋ+iktɕaŋ〉 d. 「愚公移山」〈ukoŋ+isan〉
- b. 「目不忍見」〈mok+pul+inkjʌŋ〉 e. 「人山人海」〈insan+inhɛ〉
- c. 「如出一口」〈jʌ+tɕʰul+ilku〉 f. 「一石二鳥」〈ilsʌk+itɕo〉

調べた範囲では、四字熟語の二音節目と三音節目の結び付きが C+i になつてゐるもので、n 挿入が標準発音に示されてゐたものは、次の二例であつた。

- (15) a. 「甘言利説」〈kamʌn-(<n>)isʌl〉 b. 「怒甲移乙」〈nokap+<n>iuul〉

「甘言利説」は n 挿入を起こしても起こさなくてもよいことになつてゐる。

以上から、朝鮮語の四字熟語は、そもそも形態的に二音節ごとのまとまりをなしてゐることが多く、そのまとまりの間が n 挿入の対象となる音韻語境界として振る舞ふやうである。漢語の傾向に従つて後部要素が/j/始まりであれば n 挿入が起こりやすく/i/始まりであれば n 挿入が起こりにくいといふことが、標準発音では現実発音よりも一貫性をもたせて示されてゐるものと思はれる。また、必ずしも中央に境界のある形態構造でない四字熟語も n 挿入に関しては同様に標準化されてゐる。

參考文獻

- Chao, Yuen Ren (1968) *A grammar of spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.
- Grammont, Maurice (1933) *Traité de phonétique*. Paris: Delagrave.
- Hashimoto, Mantarô (1960) 「The Bon-Shio (文昌) Dialect of Hainan — A Historical and Comparative Study of Its Phonological Structure, First part : The Initials」『言語研究』38、106–135.
- Hockett, Charles F. (1955) *A manual of phonology*. Baltimore: Waverly Press.
- Hwang, Young, Sherman Charles, and Steven M. Lulich (2019) Articulatory characteristics and variation of Korean laterals. *말소리와 음성과학 (Phonetics and Speech Sciences)* 11(1), 19–27.
- Jespersen, Otto (1933) *Linguistica : selected papers in English, French and German*. Copenhagen: Levin & Munksgaard, George Allen & Unwin.
- Kim, Hyunsoon and Allard Jongman (1996) Acoustic and perceptual evidence for complete neutralization of manner of articulation in Korean. *Journal of Phonetics* 24(3), 295–312.
- Kim-Renaud, Young-Key (1974) Korean Consonantal Phonology. Ph.D. dissertation, University of Hawai‘i.
- Kiselman, Christer (2001) Kreado de matematikaj terminoj. In Kiselman, Christer and Geraldo Mattos eds. *Lingva Planado kaj Leksikologio. Language Planning and Lexicology*. 173–187, Chapecó: Fonto.
- Laver, John (1994) *Principles of Phonetics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, Hyun Bok (1993) Korean. *Journal of the International Phonetic Association* 23(1), 28–31.
- (1999) Korean. In The International Phonetic Association ed. *Handbook of the International Phonetic Association: A Guide to the Use of the International Phonetic Alphabet*. 120–123, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lloyd, Richard J. (1899) *Northern English: Phonetics, grammar, texts*. Leipzig: Teubner.
- Lukoff, Fred (1945) *Spoken Korean*. Book One, s.l.: Holt.
- Martin, Samuel E. (1951) Korean Phonemics. *Language* 27(4), 519–533.
- (1992) *A reference grammar of Korean*. Tokyo: Tuttle.
- Pike, Kenneth Lee (1947) *Phonemics: A Technique for Reducing Languages to Writing*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Umeda, Hiroyuki (1957) 「The Phonemic System of Modern Korean」『言語研究』32、60–82.
- 李基文・金鎮宇・李相億 イ = ギムン・キム = ジヌ・イ = サンオク (1984) 『國語音韻論』、서

- 을: 學研社.
- イ=ドンファ 이동화 (2001) 『국어음운론』, 대구: 문창사, (『國語音韻論』).
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 第6卷 術語編』, 東京: 三省堂.
- カン=オクミ 강옥미 (2011) 『한국어음운론』, 과주: 태학사, 개정판, (『韓國語音韻論』).
- キ=セグワン 기세관 (1999) 「첨가음 ‘ㄴ’ 의 성격」 『선청어문』 27, 633-647, (添加音 ‘n’ の性格).
- 金鍾德 キム=ジョンドク (2018) 「韓國語の語頭の「ㄴ」の実験音声学的分析」、朝鮮学会第69回大会、2018年10月7日、天理大学.
- キム=ムリム・キム=オギョン 김무림・김옥영 (2009) 『국어음운론』, 서울: 새문사, (『國語音韻論』).
- キム=ユボム・オ=ジェヒョク 김유범・오재혁 (2013) 「경음화와 관련된 동일 조음 위치의 연속된 두 자음의 발음에 대하여」 『한국어학』 58, 31-53, (濃音化と關聯する同一調音位置の連続二子音の發音について).
- キム=ギョンア 김경아 (2000) 『국어의 음운표시와 음운과정』, 서울: 태학사, (國語の音韻表示と音韻過程).
- 後藤祐司 (2013) 「丁寧化マーカー ‘-yo’ と n 挿入現象に見られる方言差」 『ありあけ 熊本大学言語学論集』 12, 113-121.
- 武田誠・二郷美帆・益子幸江 (1999) 「韓國語における齒茎摩擦音の平音と濃音に関する音響音声学的研究: 語頭および語中で音節末子音が先行する場合」 『音声研究』 3 (2), 51-71.
- チェ=ミョンオク 최명옥 (2011) 『국어음운론』, 과주: 태학사, (國語音韻論、第2版).
- 千田俊太郎 (2012) 「基底の音節構造: 朝鮮語の媒介母音」 『ありあけ熊本大學言語學論集』 11, 1-46.
- 辻野裕紀 (2013) 「言語形式の自立性と音韻現象——現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として——」 『朝鮮學報』 229, (1)-(32).
- (2014) 「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の実現実態について (1): 若年層ソウル方言話者を対象に」 『朝鮮學報』 232, (1)-(57).
- (2016) 「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の実現実態について (2): 若年層ソウル方言話者を対象に」 『朝鮮學報』 240, (25)-(66).
- 野間秀樹 (2007) 「音声学からの接近」 野間秀樹 (編) 『韓國語教育論講座第1卷』, 221-255, 東京: くろしお出版.
- 野村剛史 (2019) 『日本語「標準形」の歴史』, 東京: 講談社.

- 橋本万太郎 (1959) 「海南語音韻論—「文昌」方言の音声論と音韻法則」『中国語学』91、12-16.
- 服部四郎 (1951) 『音聲學』、東京: 岩波書店.
- 朴惠淑パク=ヘスク (1982) 「韓国語の音節末内破音の喉頭調節—ファイバースコープおよび筋電図による観察—」『朝鮮学報』104、(25)-(60).
- ペ=ジュチェ 배주채 (2008) 『국어 음운론의 체계화』、서울: 한국문화사、(『國語音韻論の體系化』).
- (2011) 『국어음운론 개설』、성남: 신구문화사, 개정판、(『國語音韻論概説』、初版は1996年).
- 松尾勇・金善美・千田俊太郎 (2012) 『佳子のソウル留学から…—中級韓国語教材—』、東京: 同学社.
- ヤン=スニム 양순임 (2002) 「음절 말 자음의 음성 자질」『한글』258、55-82、(音節末子音の音聲素性).
- (2005) 「한국어 음절 말 폐쇄음에 대한 음향 및 청각 음성학적 연구」『한글』269、77-100、(韓國語の音節末閉鎖音についての音響・聽覺音聲學的研究).
- 油谷幸利 (2007) 「朝鮮語母語話者による朝鮮語教育」野間秀樹 (編) 『韓国語教育論講座 第1巻』、131-162、東京: くろしお出版.
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 (編) (2018) 『韓日辞典』、東京: 小学館、(1993年の『朝鮮語辞典』の改訂版).

(ちだしゅんたらう、京都大學大學院文學研究科)